

## 子どもの居場所づくりを通じた知的障害者家族の アイデンティティ形成プロセス

### The Process of Formation of Identity as Families of Peoples with Intellectual Disability in Providing Children with “ibasyo”

小 川 幸 裕

#### I はじめに

厚生労働省が2000年に行った「知的障害児(者)基礎調査」「社会福祉施設等調査」の報告では、わが国の知的障害者は45.9万人(うち18歳以上は34.2万人、18歳未満は10.3万人)、うち施設入所者は13.0万人(うち18歳以上は12.1万人、18歳未満は0.9万人)である。入所率は、18歳以上では35.4%、18歳未満では8.7%となっている。子どもの頃は家庭で育てることができても、成人すると親の高齢化などの理由で家族によるケアが困難となり、しかも本人が地域で自立・自活する環境が整っていないため、「親亡き後の生活の場」として入所施設が選ばれてきた(植戸：2007)。

2006年6月、障害者自立支援法実施に伴い厚生労働省は障害のある人たちが「住み慣れた地域で当たり前の生活をする事」を目指し、「福祉施設の入所者の地域生活への移行」の基本指針として「2011年度末までに、現在の施設入所者数の1割以上が地域生活へ移行し、入所者数を7%減らす」としている(厚生労働省告示第395号)。しかし、このような地域移行の流れの中で、不安の声があがってきている。このような「不安」は、「親亡き後の不安」ということばで、障害児者の家族に多く共有されるものである。自分の体が動かなくなった後、誰がケアをしてくれるのか。

誰が生活・健康・安全の保証をしてくれるのか。この「親亡き後の不安」をいかに理解し対応するかが課題となっている(麦倉：2004)。

このような状況の中、筆者は2002年に知的障害を持つ子どもの家族や教員などが中心となって立ち上げた子どもの居場所づくりのボランティア活動組織(以下、「Aの会」)に設立から携わるとともに参与観察やインタビュー調査を通して研究を行ってきた。これまでの研究から、このボランティア活動は「対象を限定しない」「活動目的を明確にせず今を楽しむ」ことを特徴とし、ボランティア活動に参加することを通して家族の主体性の形成を促すエンパワメント効果があることが示唆された(小川：2005)。

しかし障害者自立支援法をはじめ地域移行が重視される一方で、地域で知的障害者が自立生活をするは大変困難な状況にあり、いまだ施設入所を選択せざるえない状況がある。鈴木(2006)も、親の加齢による健康不安と、子どもの成長によるケアの重度化が、子どもの施設入所のタイミングを早めていると指摘している。「Aの会」に参加する親も「自分(親)が死んだあと子どもがどうなるか不安」「地域に居場所がない」との将来への不安を活動の動機とする中で、「将来の準備よりも今を楽しむ」ことを選択する背景には、活動に参加する過程で新たなアイデンティティを

再構築しているのではないかと考えた。

そこで、本稿では子どもの居場所づくりを通じた知的障害を抱える子どもをもつ家族のアイデンティティ形成プロセスを提示することを試みたい。

## II 研究方法

### 1. 研究の方法

#### 1) M-GTA法の採用理由

本研究の分析方法は、木下（2003）による修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）を採用した。グラウンデッド・セオリー・アプローチは、グレーザー（Glaser, B. G.）とストラウス（Strauss, A. L.）によって開発され、インタビューデータに密着して独自の理論を生成する方法であり、データと諸データの比較によって関係づけ、データのまとまりから算出したカテゴリーによって一連の現象を説明する質的研究法である（木下：2003）。

#### 2) 方法としての適合性

M-GTAは「社会的相互作用に関係し人間行動の説明と予測に優れた理論であることが期待」されており、第1に「人間と人間が直接的にやり取りする社会的相互作用に関わる研究」であること、第2に「ヒューマンサービス領域」であること、第3に「研究対象とする現象がプロセス的性格をもっていること」があげられている（木下2003：89）。本研究は、第1に調査協力者となる「知的障害者を抱える家族」がヒューマンサービス領域であること、第2に、理解のしやすさ、分析ワークシートなどの具体的手順、結果の応用を含めて検証であるという立場が明示されていたことによること、第3に知的障害者を抱える家族がアイデンティティを形成するプロセスを明らかにすることを試みるものであることから、M-GTA法を採用することとした。

### 3) 調査データの収集

本研究の調査協力者は、「Aの会」に立ち上げから関わり中心メンバーとして位置づけられている知的障害を抱える子どもを持つ家族で、調査者と面識があり調査の承諾を得られた家族9名を選定した。男女比は各女性7名、男性2名であった。

調査データの収集期間は、2007年8月から同年9月である。データの収集方法は、調査協力者との個別インタビューによって行った。インタビューにあたって研究の目的および話せる範囲で構わないこと、プライバシーの厳守について伝え、データの扱い（録音・逐語記録・分析手順と方法・結果の公開・論文化）については文書および口頭で説明し研究協力への理解を得た。インタビューは半構造化面接で行い、理解を得て録音し逐語記録を作成した。まず、現在の状況について自由に話してもらい、属性や経験などは話の流れの中で確認した。調査者からの質問は最小限にとどめ、現在の状況までの話がひとくぎりしたところで、活動への参加のきっかけや背景、転機となった出来事について聞いた。不明確な点は確認したが、話の流れを重視し、その意味合いのまま受けとめていった。面接場所は、プライバシーが確保できる「Aの会」集会所2ケース、対象者の自宅5ケース、喫茶店が2ケースで面接時間は70分～140分であった。データの扱い（録音・逐語記録・分析手順と方法・結果の公開・論文化）については文書および口頭で説明し理解を得た。特に、守秘義務の履行、結果の公開における事前の内容報告などに留意した。

### 2. 分析の具体的な手順と分析ワークシートについて

分析はデータを1行ずつ読みデータから概念生成し、概念間の関係をカテゴリーで説明する一連のプロセスをたどるが、結果の記述は逆のプロセスとして説明することになるた

め分析手順を示しておく。分析はまず、分析テーマとして設定した「知的障害者家族としての『アイデンティティ』形成プロセス」に照らして経験を細部にわたって語った人のうち、最も注目した人の逐語記録を繰り返し読むことからはじめた。最初に、重要と思われた部分の語りの意味を検討し、その解釈に沿って他の部分や他の人のデータについて類似例を検討した。そして、逐語録をもとに具体例を厳選してピックアップし、データの大きなまとまりごとに解釈及び定義を確定し、理論を構成する最小単位となる概念名を生成し分析ワークシートに記載した。その際、関連する内容や対極例などを理論的メモとして残した。次に対極例を意識しながら概念を30個程度つくった段階で分析ワークシートの理論的メモなどを参考にしながらカテゴリーを生成し結果図案を繰り返し書いた。そのたびに分析ワークシートに立ち戻り、必要があれば修正、加筆した。

### III 結果と考察

本研究は質的研究のため結果はいずれも筆者自身の解釈が含まれている。質的研究法の

特徴でもある解釈や考察を含む結果は分けて記述することが困難なため、まとめて以下で報告する。紙面の関係上、プロセス全体を詳細に報告できないため重要と思われた【 】の前後のプロセスを中心にみていくこととし、あとはカテゴリーの説明とする。

#### 1. 分析結果の提示（結果図）とストーリーライン

M-GTA では結果は概念やカテゴリーを用いた結果図で示される。結果図は図1のとおりである。分析の結果、以下のような全体像が得られた。概念を「 」、カテゴリーを【 】の記号を用いて表記している。また、以下の文中の『 』はインタビュー・データからの引用であり、引用内の括弧は筆者による補足である。ストーリーラインは以下の通りである。

知的障害を抱える子どもをもつ家族のアイデンティティ形成プロセスは2つ見出された。1つ目のプロセスは、【疎外体験】から【肯定体験】を経て【協働体験】へ至っていた。障害を抱える子どもへのケア「役割の一体化」や、社会や地域からの「良い親へのプレッシャー」によって、障害をもつ子どもと家族

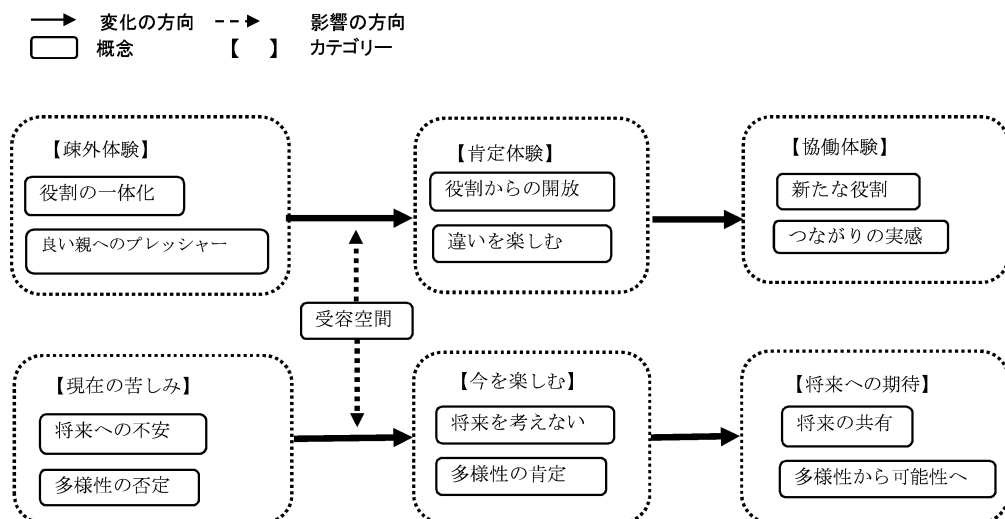


図1 知的障害者家族のアイデンティティ形成プロセス

は地域の中で孤立するといった【疎外体験】を蓄積する。このような、地域や社会からの【疎外体験】の中で居場所という「受容空間」での活動を通して他者との「違いを楽しむ」自己を発見し、「役割からの開放」によって一人の人間としてあるがまま受け入れられる【肯定体験】を契機に、他者との「つながりの実感」から生かされている自己の再確認や、子どもを他者に託したり、他者に経験を伝えるといった「新たな役割」の獲得に至っていた。これらのプロセスを経て地域の仲間との【協働体験】を重視するアイデンティティが再構築されていた。

2つ目のプロセスは、【現在の苦しみ】から【今を楽しむ】を経て【将来への期待】に至っていた。子どもや自分の選択肢が限定されたものであるという人生の「多様性の否定」や、親亡き後に地域でどのように子どもたちが生きていけるのかといった「将来の不安」など【現在の苦しみ】を抱えた生活を強いられていた。このような中で、1つ目のプロセスと同様に「受容空間」での活動を通して、「将来を考えない」ことで子どものために生きるという認識から自分自身が楽しむといった認識への変化や、他者との多様な関係性を受け入れる「多様性の肯定」によって将来のことよりも【今を楽しむ】価値を再構築していた。この【今を楽しむ】といった意識の変化を契機とし、他者からの見通しを聴くことによる「将来の共有」や、他者の存在を肯定的に評価できる自己の発見から「多様性から可能性へ」自己の認識を変化させることで【将来への期待】を重視するアイデンティティが再構築されていた。

以下、カテゴリーごとにみていく。

## 2. 【疎外体験】【肯定体験】【協働体験】

1) 【疎外体験】：「役割の一体化」「良い親へのプレッシャー」

【疎外経験】とは、学校や地域という生活を

営んでいくうえで主要な領域から疎外されていく経験をすることである。ある家族は『外は絶えず対立する場所』と自分と地域社会との壁を明確に感じとり、自分は社会と対立する関係にあると理解していることが伺える。この【疎外体験】を構成する概念として「役割の一体化」と「良い親へのプレッシャー」の2つが見出された。

「役割の一体化」とは、障害者を抱える子どもをもつ家族として地域で生活する際に受ける様々な疎外体験から子どものケア役割を親が引き受けざる得なくなり、親自身が子どものケアと自分自身の人生を一体化させてしまうことである。ある家族は『この子を私が育てなきゃいけない、人にまかせられない。ずっと気をはってきた』と述べている。また、別の家族も『最終的に自分の子を守るのは自分だから人に強要できない』と語っていることから、子どものケアを自分以外が担うことは想像できず子どものケアをまる抱えして生活せざる得ない状況に追い込まれていると理解できる。さらに『一人ではいられないことを感じて「施設にいくよ」って言われた』と子どもの言葉から自分がケアを担わなければならないとの思いを強固にしていたと理解できる。

「良い親へのプレッシャー」とは、障害児を支える良い親といった役割の遂行を求めてくる周囲からの圧力や、子どもとの生活を最優先するべきであるといった期待に応えようとすることである。ある家族は『外に行ったときは誰かに迷惑かけちゃいけない』と述べており、買い物にいくといった日常的な生活場面においても、必要以上の気を使わなければいけないといった圧力を経験していると考えられる。加えて、『良く思われたいし、どんな育て方したんだって思われたくない』と別の家族は語っており、周囲が求める期待に応えようと子育てに対し緊張感を持って生活していたことが伺える。

2) 【肯定体験】：「役割からの開放」「違いを楽しむ」

【肯定体験】とは、他者との違いを肯定的に評価できるようになるとともに、様々な役割から開放され一人の人間としてあるがまま受け入れられる体験のことである。【肯定体験】は、「役割からの開放」「違いを楽しむ」の2つの概念から構成されていた。

「違いを楽しむ」とは、自分と他者の考え方の違いや生き方の違いを否定するのではなく、楽しむことである。これまでの【疎外体験】から他者との違いが排除につながることを経験してきている中で違いを認めることは難しいことが推測できる。しかし、ある家族は『障害あるなし関係ない人たちの集まりだから魅力ある』と述べ、また別の家族は、『同じようなタイプの親御さんの集まりとは違うところがAの会』と、違うタイプの人間の集まりを肯定的に評価していることが伺える。

次に「役割からの開放」とは、これまで障害児の家族としての役割を常に意識して生活してきた中で、役割から開放されて一人の人間としての参加が可能となっていることである。ある家族は、『期待されるものを演じなくていい』、『当事者だけでなく、大人の人、スタッフでもありのままでいい』と述べており、別の家族は、『その場所での自分の役割が取り払われてしまっすぎて楽しく、構えないで』参加できると述べている。これは、家族だけでなく他のスタッフにも当てはまり『(役割や期待)をもともと降ろしちゃっている人がいる』と、参加するメンバーの多くが役割を解放した状態で参加できているため、役割を意識することなく参加できていると考えられる。ある家族は「自分の心の中にある一生涯倒みてやるんだってことから開放された」と語っており、子どものケア役割をも手放すことができていると解釈できる。

3) 【協働体験】：「新たな役割」「つながりの実感」

【協働体験】とは、他者とのつながりによって生かされている自己を再確認することによって、地域の仲間とともに協働するアイデンティティを構築することである。ある家族は、『私たちの子どもたちだけがいいっていうふうには、この仲間は思っていない』と述べており、自己の幸せと同様に他者の幸せも願っていると解釈できる。また別の家族は、『地域をつくっていくっていう意識がベースになっている。それも一緒に入っているというのが欠かせない』と、自分たちの願いである子どもたちが地域で生活できるようになるためには、協働して地域をつくっていくという意識が必要であると感じていると考えられる。この【協働体験】は、「新たな役割」と「つながりの実感」の2つの概念から成る。

「つながりの実感」とは、自らも一人の人として生活や人生という現実を生きていることを自覚し、それを接点として他者とのつながりを認識することである。ある家族は、現在の自分が多くの仲間を支えられていることを『みんなの力があって今の現在の自分がある』と語っている。また自分がケアを担えなくても将来を託すことができる仲間を得ていることも「つながりの実感」に影響を与えていると考えられる。

「新たな役割」とは、これまでは障害を抱える子どもをもつ家族として子どものケアや支援を受ける役割を担ってきたが、自らもこれまでの経験を活かして他者に支援を行う自己を認識することである。ある家族は、『聴いてあげられる側になった』とこれまでは不安や悩みなどを聴いてもらう側だったのが、自分と同様の経験をしている家族の話の聴き助言できる自己を意識していることが伺える。また、ある家族は『いずれは他人の手を借りて生きていかなければいけない子なので他人に委ねる土台をつくってあとはまかせねっ

て』と語っており、他者とのつながりを実感できたことで他者に委ねるという新たな役割を認識できていると考えられる。

### 3. 【現在の苦しみ】【今を楽しむ】【将来への期待】

#### 1) 【現在の苦しみ】：「将来への不安」「多様性の否定」

【現在の苦しみ】とは、これまでの【疎外体験】などのネガティブな経験の蓄積によって将来への不安や悩みを強化させてしまうことで自ら選択肢を限定してしまうことである。この【現在の苦しみ】は、「将来への不安」「多様性の否定」の2つの概念から成る。

「将来への不安」とは、親亡き後に地域でどのように子どもたちが生きていけるのかといった不安を抱えて生活することである。ある家族は『自分たちの子どもが将来どうなるんだろうって不安を抱えながら生活している』と、障害を持つ子どもの将来への不安を感じていることが伺える。また別の家族も、『私たちがなんぼ生きていって言ったっていつまで生きられるか』と親自身の死が子どもの生活を左右するといった思いを強く抱いており、子どもを託せる仲間がないことがさらに将来への不安を強めていることが伺える。

「多様性の否定」とは、これまでのネガティブな経験の積み重ねによって将来が見通せない不安から、子どもや自分の人生の選択肢が限定されたものであるという思い込みをもつことである。ある家族は『自分の子(の変化)は分からない。変わらないって自分の頭で思っちゃってるから』と、自ら自己の子どもに対する変化の可能性を否定していることが伺え、子どもへの評価の歪みや視野が狭くなっていると考えられる。また、別の家族は『自分の子だとどうしても希望的にこうあって欲しいって』と子どもへの思いの強さが子どもの姿や自己の姿を限定的に捉えることに

つながっていることが伺える。

#### 2) 【今を楽しむ】：「将来を考えない」「多様性の肯定」

【今を楽しむ】とは、【現在の苦しみ】を経た家族が、“居場所”づくりの活動の中で、子どものために生きるという価値から自分自身も楽しんでいいんだという新たな価値を再構築することである。ある家族は、『大人が楽しくしてるんだもん、子どもも楽しいでしょ』と将来に備えて活動するだけでなく、今を楽しむ活動を肯定的に評価していると解釈できる。また別の家族も『Aの会に行ったら子どものことは考えない。自分のことだよ』と、大人が生き生きと楽しむ姿を子どもが見ることによって、子ども自身もその空間を楽しめるのではないかと考えていることが伺える。

【今を楽しむ】は「将来を考えない」「多様性の肯定」の2つの概念から成る。

「将来を考えない」とは、疎外体験などこれまでネガティブな経験と捉えていたものを、現在の自分にとって必要な経験であると肯定的に理解し今を生きる認識を持つことである。ある家族は、『ほんととエピソードは全部プラスになるの』と語っており、また別の家族は『(子どもが障害をもって)良かったって思わないけど悪かったとも思わない』と述べている。その他にも子どもが障害児であることで地域から孤立してきたという理解以外に『子どもがいて変わってこれた』『子どもがいなかったら障害者にも理解ないだろうし』と障害者を抱える家族であることで視野が広がり、自己の人生が豊かになっているとの意味づけが行われていることが伺える。

「多様性の肯定」は、活動の目的を明確化しないことで、多様な子どもとの関わりを通してこれまでの考え方や自己の子どもへの関わりを問い直す機会を得ることで多様な関係性を受け入れることである。ある家族は、『人の子を見るっていうのは自分の子を見るより

楽』と自己と一体化しない「個」として子どもをみることの違いを感じていると解釈できる。また、ある家族は『子どもは勝手にいっちゃって、何で私よりあっちの方がいいんだ』と述べている。これは、これまで自分が誰よりも子どものことを理解していると確信していたが、他者と楽しそうに関わる子どもを見て、自己の関わりや価値観に疑問を抱く経験になっていると考えられる。また別の家族も『自分の子どもが私たち（親）に見せる顔と違う』『自分以外の人が子どもたちにこういうふうにならなくていいんだ』と述べており、子どもの楽しそうな姿を見て嬉しく感じると同時に、寂しさを感じる経験でもあると解釈できる。他者が子どもと上手く関われることで戸惑う中、『親の自己満足っていうか』とこれまでの考え方や関わり方が自己満足であったのではないかという反省につながっていることも伺え、子どもや自己の客観的な理解につながっていると解釈できる。

### 3) 【将来への期待】：「将来の共有」「多様性から可能性へ」

【将来への期待】とは、【現在の苦しみ】がこれからも続くわけではなく将来への期待を持つことである。ある家族は、『それが(大変さ)がずっと続くわけじゃなくて、通り過ぎていくところなんだってことが分かる。人の話を聴くことによって、通過していかなくちゃいけないって』と述べている。この【将来への期待】を構成している概念として、「将来の共有」と「多様性から可能性へ」が見出された。

「将来の共有」とは、これは障害を抱える子どもの将来イメージが持ちにくい中で、少し先を歩く先輩の姿や話を聴くことで経験を共有し安心できることである。ある家族は、『その人たち（自分よりも年上の子どもを抱える親）の歩みを見て自分もあういうふうになるのかな』、『自分はこっちの方向に行こうか

なって参考にさせて頂く部分っていうのは大きい』と述べており、他の親や子どもの姿に触れることで、子どもを含め自分のこれから歩む方向のイメージ化につながっていると解釈できる。また、『人の話を聴くことによって通過していかなくちゃいけない』と知的障害をもつ人の成人期における生き方や親の行き方のモデルを獲得すると同時に、現状を打破する必要性を認識していけると考えられる。

次に「多様性から可能性へ」である。これは、他者との違いを受け入れることで他者の存在を肯定的に評価できる自己を発見し将来への可能性に触れることである。ある家族は、『私たちも大きくなれば子どもよりも先にこの世を去るわけですから、若い人たちがこの子どもを見てくれるかなっていうのを考えられるのは大きい』と自分たち家族以外の多様な他者が子どもを支えてくれるのではないかと認識から将来への可能性を感じていることが伺える。別の家族も、『居場所も含めて環境っていうのはすべて変えられるという確信ができた』と述べている。これも、障害児を抱える家族という限定された環境を変えることが可能ではないかと認識を持つに至っていることが伺える。

## 4. 「受容空間」

プロセス全体において注目されるのは「受容空間」である。これはあるがままの自分を受容することを保障する空間のことである。ある家族は『こんな何も出来なくても、みんな受け入れてくれている』と述べている。「役割の開放」によって一人の人間としての参加が促されると同時に、役割を持たないことによる不安を抱えることになるが、周囲の期待に応えられていないと感じる自分が受け入れられると感じることができていると解釈できる。別の家族も、『(失敗しても)責められない』『できないなら、だれかフォローしてくれる』と語っている。また、『そのままでもいいんだっ

という安堵感』があると述べ、期待に応えなくても、または役割を持たなくてもそこにいていいという感覚をもてていると理解できる。このような、あるがままの自分でいられる空間が保障されていたことで、認識の変化を可能にしていたと考えられる。

#### IV 結び

以上、本研究では子どもの居場所づくりへの参加を通じた知的障害者を抱える家族のアイデンティティ形成プロセスの提示を目的に質的研究を行った。その結果、【疎外体験】によって子どものケア「役割との一体化」に導かれた家族が、居場所という「受容空間」への参加を通して【肯定体験】によってこれまでの経験を肯定的に意味づけると同時に、【今を楽しむ】自己を発見していた。これらの過程を経て、家族は子どもの幸せだけでなく他者や地域の幸せをも含む自らの幸せを求める【協働体験】や【将来への期待】といった新たなアイデンティティを再構築していることが見出された。

これらの過程で再構築された他者の幸せも含んだ自己の幸せを追求するアイデンティティは新たに形成されたものというより、むしろ潜在化していたアイデンティティが顕在化したとも考えられる。それは、いまだ障害者を抱える家族が社会から疎外され、自らの人生を主体的に生きる力を奪われていることを示しているのではないか。

現在の社会福祉制度は、当事者によるサービスの選択・利用を基本としており、援助者側には当事者の主体性を尊重するために、個人の主体的側面を個人の主観的世界にそった理解、つまり当事者の価値の理解が求められている。そのため、近年ではこれらの領域を対象とする研究において病や障害をもつ当事者の主観性に着目した質的研究が多く行われている（土屋：2002）。しかし、安藤（1995）

はこれまでわが国において社会福祉の研究の場、実践の場のいずれにおいても、障害児者を対象とする研究やサービスの実践は行われてきたものの、それを支える家族に焦点が当てられることはほとんどなかったと述べている。その理由の一つとして、これまで病気・障害が、研究者や現場の実践者といったいわゆる「専門家」の視点からしか理解されてこなかったこと、そしてその結果つくられる社会政策が、計画の対象となる人々にとっての意味、経験と無関係なものとなってしまっていたことが指摘されている（麦倉：2004）。このような状況において、知的障害者を抱える家族のナラティブ（語り）やストーリー（物語）を聞き、それを顕在化することは家族が組み込まれている社会的文脈の理解だけでなく、当事者の主体的なサービス選択や地域生活を支える上で重要な視点になると考える。

最後に本研究における限界及び今後の課題について整理したい。調査の限界としては、第1に一定の経験を有する家族の経験に着目していることから、地域において知的障害者家族として生き延びた人が前提となっていることである。つまり、これまでの経験を肯定的に捉え直すことができた家族を対象としているため、それ以外の家族の経験には言及できない。第2に、調査協力者を設立から関わる中心メンバーを対象としたところ母親が7名、父親が2名となった。今回の研究で重要な概念となっていた「役割の一体化」において、母親と父親に期待されるケア役割が現代社会において異なることが推測されることから、今後はジェンダーにも配慮した調査設計が必要であろう。第3は、信憑性の確保に関する手続きが不十分であったことである。質的研究はいずれの方法も結果の妥当性が問題となることが多い。そのため、M-GTA法を習熟している社会福祉研究者によるスーパービジョンや分析結果を文章化したものを面接対象となった調査協力者に報告し、それぞれの



実践経験に照らして信憑性があるか、理解し難い点はないか意見聴取などを行うことで信憑性の確保に努めることが求められよう。

## 注

- (1) 調査研究では調査者がデータ収集の対象とする者のことを「調査対象者」とするのが一般的である。しかし、本研究ではデータ収集後も分析結果の現実への適合性等の確認などの協力を依頼していることから「調査協力者」とした。

## 参考文献

- 安藤 忠、1995、「障害をもつ子供をかかえた家族への福祉的援助の課題——ファミリー・サポート・サービス概説」、右田紀久恵著、『地域福祉総合化への途——家族・国際化の視点を踏まえて』、ミネルヴァ書房
- 木下康仁、2003、『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践——質的研究への誘い——』、弘文堂
- 夏堀 節、2003、「障害児の「親の障害受容」研究の批判的検討」、『社会福祉学』44(1)：23-33
- 三毛美予子、2007、「母との闘い——親と暮らしていたある脳性麻痺者がひとり暮らしとしての自立生活を実現する一過程——」、社会福祉学第47巻第4号：98-109
- 麦倉泰子、2004、「知的障害者家族のアイデンティティ形成についての考察——子どもの施設入所にいたるプロセスを中心に——」、社会福祉学第45巻第1号：77-86
- 村杜 卓、2005、「ソーシャルワーク実践の相互変容関係過程の研究」、川島書店：24-25
- 小川幸裕・内田雅志・山内太郎、2005、「地域における障がい児・者の居場所づくりを目指して」、『北海道ノーマライゼーション研究』17：109-120
- 小川幸裕、2006、「『福祉拠点』に関する研究——地域における子どもの『居場所』づくりの事例から——」、北星学園大学大学院論集9：39-47
- 鈴木 良、2006、「知的障害者入所施設A・Bの地域移行に関する親族の態度についての一考察」、社会福祉学第47巻第1号：46-57
- 関谷真澄、2007、「『障害との共存』の過程とその転換点——精神障害を抱える人のライフストーリーからみえてくるもの——」、社会福祉学第47巻第4号
- 澤田真寿美、2007、「障害のある子どもへの余暇支援と家族支援——支援者の願いと専門性——」、総合社会福祉研究第30号：65-70
- 高林秀明、2008、「障害者・家族の生活問題——社会福祉の取り組む課題とは——」、ミネルヴァ書房
- 土屋 葉、2002、『障害者家族を生きる』、勁草書房
- 植戸貴子、2007、「知的障害者の地域生活移行とソーシャルワーク」、ソーシャルワーク研究33(2)：22-28
- 右田紀久恵、1995、「『福祉社会』と地域福祉総合化への途」、右田紀久恵編著、『地域福祉総合化への途——家族・国際化の視点を踏まえて』、ミネルヴァ書房
- 横山登志子、2006、「『現場』での『経験』を通じたソーシャルワーカーの主体的構成プロセス——医療機関に勤務する精神科ソーシャルワーカーに着目して——」、社会福祉学第47巻第3号：29-41